

小ねぎのは種期と収量性について

1 試験のねらい

近年、本県にも小ねぎが導入され、ハウス栽培を中心に産地が形成されつつあるが、は種期に応じた品種や生育特性が十分把握されていないのが現状である。そこで、これらの点を明らかにするため、は種期と生育、収量の関係につき、品種及び栽培様式を組み合わせ、昭和55～56年の2年検討した。

2 試験方法

岩槻葱ほか9品種を用い、昭和56年5月15日、7月15日、9月15日、12月15日及び57年3月15日の5回は種し、図-1のとおりハウスと露地を組み合わせた。規模は1区3m²、1区制で、は種は条間30cmの4条に条播し、は種量はa当たり200mlとした。なお、ハウス栽培は11月～3月の期間のみ小トンネルを併用し、30℃を目標に換気を行った。

3 試験結果及び考察

は種期と収穫期の関係は図-1のとおりで、5月、7月及び3月までには各品種ともは種後約50～60日で収穫期に達したが、9月及び12月までには80（九条太、わかさま）～120日（9月まき岩槻）を要し、品種間差も大きく現われた。収量は、ハウス栽培では5月、12月及び3月まきがほとんど差がなく多収で、7月まきは上物率低く最も低収となった。また、露地栽培では5月に比較し7月まきでやや低収となったもののハウス栽培よりは増収した。なお、1株重や茎径は、同一は種期ではハウスに比較し露地栽培が優れ、ハウスでは9月及び3月まきで重く、太い傾向が認められた。

各品種のは種適期と特性は表-1のとおり、品種によっては種適期は大きく異なるが、収量、品質及びそろいなど実用性を考慮した場合、年間には種可能な品種は奴及び浅黄系九条（高山）の2品種のみで、奴は供試品種中最も品質的に優れた。次いで、厳寒期の栽培にはそろいなどに問題はあがるが、春～秋のは種では多収で、品質的にも奴に劣らぬわかさまが実用性高い品種と思われた。

4 成果の要約

当地方における小ねぎのは種期と生育、収量及び収穫期の関係を明らかにするため、品種及び栽培様式を組み合わせ、検討した結果、は種期に応じた栽培様式の組み合わせで年間を通じては種が可能であるが、露地栽培は風雨の影響を受け品質が低下しやすいので、高温期でもハウスまたは雨よけ栽培が適すると考えられた。なお、品種によっては種適期がそれぞれ異なるため、は種期に応じた品種を選定することが重要である。

（担当者 野菜部長 修）

は種 月日	栽培 様式	1株重 g	月											
			5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
5.15	ハウス	5.1	●—————□											
"	露地	6.9	●—————□											
7.15	ハウス	4.6	●—————□											
"	露地	8.8	●—————□											
9.15	ハウス	6.8	●—————□											
12.15	"	5.8	●—————□											
3.15	"	6.4	●—————□											

注 収穫期は草丈が30~50cmの期間とした。

図-1 は種期と1株重及び収穫期の関係(10品種平均)

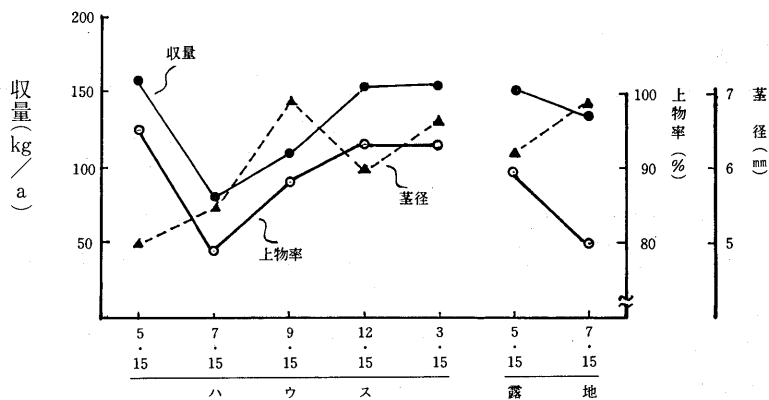


図-2 は種期と収量(10品種平均)

表-1 各品種のは種適期と特性

品 種	は種適期	特 性
岩 槻(トキタ)	春	7月以降はそろい悪く, 冬期は株が太りすぎる。
浅黄系九条(高山)	年 間	秋まきで最も優れる。
九 条 太(不二)	冬~春	夏~秋は, そろい劣り, 低収。
奴 (丸種)	年 間	供試品種中最も優れる。秋まきでやや収量低下。
浅黄系九条(タキイ)	—	そろい悪く, 冬期は株が太りすぎる。
浅黄九条(丸種)	春~夏	そろいはやや劣る。
浅黄系九条(不二)	冬~夏	"
九 条 細(武蔵野)	冬	12月まきのみ多収でそろい良いが, その他は劣る。
わかさま()	春~秋	奴について優れる。ただし, 冬はそろいに問題。
下仁田一本太(カネコ)	—	最も多収だが, 生育遅く, そろい不良, 株が太りすぎる。